日本キリスト改革派教会の説教

金田 幸男

はじめに

いうまでもなく、可見的教会のしるしは、御言葉の説教と正しく執行される聖礼典である。地上の教会がいかなる形態をもち、現実にどのようなあり方であっても、時に、悲しむべき堕落した状態であっても、そこに御言葉の説教と聖礼典がかろうじて維持されているならばそこになおも真の教会がある、これが改革者、特に、カルヴァンの確信であった。[1]

一　宗教改革と説教

では、御言葉の説教とは何か。自明の問いのように響くけれども、十六世紀の宗教改革者たちにとっては決して自

明のことではなかった。真実の説教といえるものがなかったからである。教会の講壇は、そこで説教はなされていた。しかし、中世の説教はスコラ学の構造そのままの思弁で、王族貴族を対象とする一種の訓話的なものが行われていた。修道院でも説教はなされていたが、事柄の性質上、修道者を対象としたものであり、内容も修道者の誓約を再確認させるようなものであったことが知られる。市井の、あるいは、農村の、いわゆる世俗的な小教区にあるような、民衆に接する教会の講壇では、ミサのみが行なわれていたのであり、そのミサに接するのも、年に一、二回、さらに、迷信的な呪文と化したラテン語の式文が唱えられるのみであり、聖体（ホスティア）といわれるパンに与かっても杯からは遠ざけられていた。また、巡回説教者といわれる、庶民の教化を目指す一群の職業的説教者たちが存在したが、その説教は所詮庶民を教化する手段であって、寓話的な、あるいは聖人の功徳を喧伝する、宗教的なプロパンガの類いでしかなかった。[2]

そこに見られるのは、絶望的な民衆の霊的暗黒であった。改革者は単に教会組織や制度の変革を求めたのではない。あるいは、特権階級であった聖職者たちからその特権を奪うことが改革の目的であったわけでもない。宗教改革は教会改革であり、礼拝の改革であるという定義は正しい。[3] 神学の改革も教会制度、国家との関わりの改革も当然含まれる全般的な改革「運動」であった。

しかし、改革者が元来見ていたものは民衆が「飼うもののない羊のように」霊的に暗黒状態の捨て置かれている事実であった。この民衆を霊的暗黒から救い出すために改革者が追い求めたものは、礼拝において、まことの救い主が「提供される」ことであった。あえて、提供するという表現を使用したが、単にキリストが描き出されるだけでは不十分であった。ミサは迷信である、これが改革者の強烈な批判であった。しかし、ミサにおいて、キリストがそのものとして差し出されるのであった。これが中世カトリックの教説の根幹にあった。だからこそ、ミサの聖体が一部ひ

そかに持ち帰られ、万病の秘薬として病人などに分け与えられるという「迷信」もまかり通ったのである。迷信は迷信に違いない。けれども、そのように受け取られるからにはミサの持つ力が信じられていたという証拠でもある。改革者は、この慣行を迷信として民衆から退けてこと足れりとするような、高踏的な神学の徒ではなかった。

説教を重んじるのは、ミサではなく、神の言葉の説教と共に正しい聖餐の執行がキリストを提示するという、改革者の「発見」があったからである。[4] そこでは正しい意味において、キリストが現臨し、ご自身を提供しておられるということが信じられなければならなかった。聖餐におけるキリストの現臨在の問題は改革者の最大の課題であったといっても過言ではないであろう。この問題をめぐって宗教改革と対抗改革の血生臭い戦いの時期でも、宗教改革陣営が一致できなかったのである。（一五二九年のマールブルグ会談の決裂、それだけではなく、のちのプロテスタント内部の抗争は聖餐論の相違が主たる原因であった。）

ミサにおけるキリスト提示の問題は、改革者によれば、キリスト制定辞に基づくとされる（ルター）。つまり、キリストがそこに現臨する確かさは御言葉によって保証されるのである。御言葉のない聖餐は考えられない。

説教は、聖餐と同じではない。しかし、示すものは同じである。[5] 改革者はこれをまことの教会のしるしとして承認する時、説教もまた聖餐と同じく、キリストを提示する不可欠的要素として認められていたはずである。改革者が説教を重んじるのは、キリスト、しかも、救いの根拠である贖い主、キリストを提示し、提供するからである。その意味で説教は恩恵の手段である。霊的暗黒状態の中にある民衆の魂を救済する手段として、説教が聖餐と共に重視されるのは当然のことである。[6]

説教は宗教改革の教会の強力な武器であった。いろいろの意味でそのように言える。強烈な政治プロパガンダ、カトリックへの弁証、弁駁の手段、民衆教化手段、等々。確かに、マス・メディアが発達していなかった時代に、今日

以上に説教は大きな力を持っていた。改革者はただそのためにのみ説教を使用したわけではない。

あくまで、根本はキリスト提示の方法であった。

まだそれだけでは説教はキリストを提示する手段とはならない。改革者にとって、どのように説教がなされるべきかが課題であったが、説教の方法、説教理論について統一したマニュアルなどというものは持ち合わせていなかった。中世以来の説教はあったけれども、それを踏襲するわけにはいかなかったから、改革にふさわしい説教のスタイルやパターンを作り出さなければならなかった。

改革者の周囲には民衆だけではなく、改革された教会の教職や教職候補があまた存在した。この教職の大半は、改革される以前の教会の教区司祭、改宗した修道司祭、ヒューマニストから改革運動に飛び込んできたレイマンであった。彼らは改革された教会で聖務を続けなければならない。日々、彼らは説教をし続ける義務がある。この庶民に直接、接する説教者の説教を確定しなければ、宗教改革の前進は現実のものとはならない。この認識が改革者の課題であった。[7] 改革者はこれらの人々にも説教の模範を示さなければならなかった。ルターの場合、これら教育を受けていない牧師のために、ヴァルトブルグ城幽閉以来、朗読される説教集を執筆している。宗教改革者の多くはこの種の説教集を刊行している。ただし、カルヴァンは、説教集の出版には消極的であった。説教は一回限り、特定の場所、時間になされるべきであるからだ。とはいえ、説教のひとつの型として、朗読説教の価値は不当に過小評価されてはならない。今日でも、専任の牧師のいないところで、説教が朗読されるという方法は現になされており、テープでの説教聴取よりも、会衆の代表が心を込めて説教を朗読する方が、説教の、時間・空間的制約を表現できるかもしれない。

いかなる説教がなされるべきか。実際、牧師志願者を教育することは宗教改革の緊急で重要な課題であった。カルヴァンの場合、早くからこの必要を覚えていたが、実現されるためにはジュネーブアカデミーの設立を待たなければならなかった。教育機関があってもなかってもこの務めは果たされなければならない。多くの場合、候補者の教育は一種の徒弟制度であった。要するに、見聞きし、いわば先輩の仕事を盗み見るのである。それだけ余計に、改革者のする説教は教会に大きな模範を示すことになる。

二　改革派教会の説教の源流

宗教改革者カルヴァンは「連続講解説教」という説教の方法を試みている。なぜ、カルヴァンが連続講解説教を試みたかの答えは、一概にこれだというわけにはいかないが、今まで述べたような要因を無視することはできないであろう。[8]

改革派の伝統において、必ずしも、連続講解説教が特に重んじられたいたわけではない。説教の伝統が時代において特徴を異なって当然のことである。

改革派の伝統の中でも、この連続講解説教が常に維持されてきたのではない。ただ、その特性、その効力が何度も繰り返し認識された。特に、カルヴァンの教会的な戦いが評価される時と軌を一にする。（ナチス支配下のドイツ・教会闘争は説教運動でもあった。）

我が国の教会の講壇においても、必ずしも、連続講解説教が主流であったとはいえない。教会の現実が連続講解説教を求めないという事情もあった。ミッション・フィールドとしての日本では、教会は伝道を最大の課題としなけれ

ばならなかった。連続講解説教は、常にある一定の、固定した聴衆を前提にする。礼拝毎に新しい来会者が来る日本のキリスト教会では、単発的な、それ自体で完結しているような礼拝説教が求められる。主題説教、あるいは、一つの、いわゆるグレートテキストによる説教が頻繁に行なわれるのはごく自然な成り行きである。明治以降の、日本のキリスト教会の指導者の説教集は、その大半が主題説教である。この傾向は今も変わらない。説教集が数多く出版されている。今手元にある説教集を見ても、連続講解説教の方が少数である。

にもかかわらず、日本キリスト改革派教会は事情を異にする。この事情を、本稿において、考察を試みたい。

三　連続講解説教の特徴

連続講解説教は、一つの、聖書の書巻を取り上げて、主日毎に、適当な長さのテキストを講解する型の説教である。講解とは、聖書テキストの説明・解説である。この連続講解説教の特徴は何よりも、聖書テキストに固着するという点である。説教は神の言葉である聖書テキストの説き明かしである。[9]

説き明かしの方法は、講解だけではない。[10] 神は説教者の実存を通して語られるのであるから、説教者の信仰の体験や信仰敬虔を語るという説教もまた神の言葉の語りかけでありうる。しかし、時に、説教者が自らを語るだけで終わることもある。これでは神の言葉の語りかけを聞くことはできない。講解説教は聖書の流れに沿って語るのであるから、少なくとも神の言葉そのものを語らざるをえない。

さらに、連続であるゆえ、断片的ではなく、パウロならパウロの、福音書記者なら福音書記者の思想を語ることができる。神が霊感されたのは聖書著者であるとともに聖書記者の人格とそれに密接する思想も霊感されたのであるから、元来、まとまった聖書記者の思想を説教は語るのである。連続講解説教がこれに適しているのは言うまでもない。[11]

連続講解説教は聞き手にとって、説教者の解説を神の言葉として聞くことができるという利点をもっている。この利点は何よりも代え難い。また、講解説教は、元来、文脈からかけ離れた聖書の使用に対抗して、宗教改革者が採用した方法であり、聖書の文脈を捉え、その文脈に沿って、聖書テキストが説き明かされる。この方法が聖書のメッセージを正確に聞くのに適しており、あくまで、御言葉に固着する方法なのである。

連続講解説教は長所ばかりではない。まず第一に、アピールという点で、講解説教は主題説教などに譲る。このことは、講解説教にアピールが不可能だとか、あるいは不要だということではない。それどころか、説教においてメッセージが語られ、説教者が訴えるところは明確で、しかも重点的になされなければならない。講解説教もこの点に欠けるならば、説教が本来使命とするところを果たすことができない。第二に、連続講解説教の特色がこの説教の短所となる。つまり、単発の説教とはならない。主題説教はその一回の説教に説教者の思いを集中することができる。連続講解説教は、長ければ数年間にわたり、聖書の各々の文書を解説しなければならない。説教一回ではそれ自体完了しない構造となっている。連続講解説教の場合、たった一回だけ講壇で奉仕して、説教者の使命を果たすことは困難である。会衆がいつも入れ替わるようなところには向いていない。今日、いろいろな事情で主日厳守を建前としつつも、もはや全主日礼拝出席の特権を享受できる会衆を確保できない状況では連続講解説教のメリットは限られていると言わなければならない。むろん連続講解説教において、説教者は一回毎、その説教だけを聞くもののために配慮や工夫をしている。しかし、限度はある。

第三に、連続講解説教は、数年かけて一つの文書や書簡を解説する。まして、聖書全体を連続講解するためには説教者の生涯にわたって説教がなされなければならない。この点、教会暦に基づく聖書日課では二、三年、時には一年

毎、救済史の枠を語ることができる。つまり、創造から終末までを筋道だてて語ることができる。この方がはるかに教育的である。それによって、聖書の使信の大枠を理解できる。連続講解説教はかえって、断片的な知識を切り売りする弊害を招きかねない。つまり、説教者は連続講解説教をすることで、聖書を切れ目なく学ぶのだが、聞いているものはその祝福に与かれないという乖離を招来することにもなる。第四に、連続講解説教はそれなりの力量を求められる。主題説教の方が比較的聴衆の関心に沿った説教となる。聴衆の事情を知る定住の説教者は会衆の霊的な状態を把握して主題を選べる。連続講解説教では、聴衆の興味や関心を引き、耳を傾けさせるために、それ相応の雄弁、説得力を必要とする。

このような短所にもかかわらず、日本キリスト改革派教会では連続講解説教が好まれる。それは、この短所を補って余りある価値が連続講解説教にあるからである。[12]

四　田中剛二牧師の説教

①取り上げる理由

日本キリスト改革派教会の説教者として田中剛二牧師を挙げる。この説教者を取り上げるのは、日本キリスト改革派教会の代表的な説教者であったこと、また、長く神戸改革派神学校の教師として、学生の指導にあたったこと、そして、比較的多くの書き残された説教集を読むことができることが理由である。日本キリスト改革派教会の説教に与えた影響は、他の有力な指導者に決して劣らない。特に、改革派創成期に、若い教職や信徒に与えた影響、説教者のパトスは追随を許さないと言うことができるであろう。

②略歴

神港教会七十年史に田中剛二牧師の略歴、年譜、詳細な著作目録と若干のエピソードが記されている。[13] それによれば、田中剛二牧師は、一八九九年（明治三十二年）、広島で、日本キリスト教会伝道者であった田中日出海の次男として生まれている。小学生の時父を失い、上京し、早稲田中学に入学し、そのまま早稲田大学予科に進む。しかし、このころ、アナーキズムに触れ、傾倒し、中退して、大阪で労働者となり、革命を志向するようになった。旧満州に渡り、革命下のロシアに入ろうとしたようであるが果たせなかったため、官憲の目を避けて、一九二二年（大正十一年）神戸神学校に入学している。この神学校在学中に第二の回心というべき、正統主義的な改革派神学とその信仰に出会う。[14]

フルトン校長から改革派神学の真髄を学ぶと共に、真剣にカルヴァンのキリスト教綱要を読み始めている。その当時であったと思われるが、特に、キリスト教綱要の「フランソワI世への献呈文」から、フランス・プロテスタントのいわれなき虐待へのカルヴァンの弁証、弁駁に驚異を感じ、信仰がただ心の内面の一部だけを領するものではなく、根本的に社会や世界を動かしうる動因であること、そのために、事実、命懸けで戦うキリスト信者の歴史的存在に目が開かれたと、神港教会の青年たちに熱っぽく語られたのを思い出す。説教者としての実存が説教と切り離せないとすれば、この経験は説教の中でどのように反映してくるか興味あることであるし、説教の特質を考える上で見逃すことはできない要素である。

一九二六年、高知県の南西に位置する須崎伝道教会牧師として赴任する。この教会は、米国南長老教会の開拓した教会であり、米国南長老教会と深い関わりのある中央神学校の卒業生が赴任することはごく自然のことである。とこ

ろが翌年、田中牧師は日本基督教会の伝道者になり、すぐに、高知教会の多田素牧師から副牧師として協力して働くように招かれる。この経過については想像する他はないが、当時の南長老教会ミッションと高知教会は微妙な違いがあり、多田素牧師が中央神学校の卒業生を副牧師として迎え入れたことは異例のことであり、田中牧師の伝道者、特に説教者としての非凡さを多田牧師が早くから見抜いていたとすることはできるのではないか。一九二八年日本基督教会教師に任職。

高知教会副牧師時代に米国留学を果たす。はじめ、保守的な改革派神学の泰斗であった、ウォーフィールドの影が濃かったプリンストン神学校に入るが、その自由神学化に反対してプリンストンと袂を分かったグレシャム・メイチェンらが設立した新興のウエストミンスター神学校に転じた。このメイチェンとの出会いが田中牧師に決定的な影響を与えたことはその説教を研究する上で重要である。メイチェンは新約学を講じ、その主要な著作は「パウロ宗教の起源」「処女降誕」である。これらの書に共通するのは近代の合理主義批評学の結論を聖書の緻密な研究によって一つ一つ反論し、聖書記述の歴史性、真理性を論証していく手法である。このメイチェンの新約聖書研究の手法が実際に聖書に当てはめられるのは「ガラテヤ」書研究であろう。[15] 田中はこの聖書に対するアプローチをペテロ前書注解[16]で明らかにすることになるが、それ以上に、ほとんど終生追求し続けたガラテヤ書の講義でもこれを明らかにする。[17]

帰国後は高知のミッションスクールや旧制高等学校の生徒や学生と聖書研究会を行ない、多くの青年たちを聖書に惹きつけている。この高知時代、説教者として、どのような内面や技量の上で成長したのか。多田牧師は当時、日本基督教会の最有力の牧師であった。[18] 田中牧師が多田牧師の説教をどのように評価していたか、知るよすがもない。田中牧師が後年、影響された説教者の名を挙げたことがあるが、植村正久、高倉徳太郎、それに、山室軍平であった。

田中牧師は帰国直後、ピアソン著「原語は・新約聖書原語」（一九三四年）、ペテロ前後書注解（一九三八年）を相

次いで出版している。（この時代、多作でボエトナー「カルヴィン主義予定論」など数冊の著訳書が出版されている）前の二冊は田中牧師の説教を理解する上で看過できない労作である。前者は新約聖書の原語の歴史的、文学的な意味の解説であるが、田中牧師の説教は、聖書テキストの一字一句を決して見逃さない。聖書の原語霊感を受け入れるものがテキストの言葉そのものを軽んじては自己撞着となる。後者は、原語を含めて、聖書の字句を丁寧に解説する。聖書字句の丁寧な解説こそ連続講解説教の真骨頂であるし、特色なのである。

一九四〇年（昭和十五年）神戸の神港教会に招聘され、一九七九年に七九歳で召されるまで、牧師として奉仕した。その間、すでに一九四一年から中央神学校の講師として神学教育に参加するが、教職者養成の本領は戦後、神戸改革派神学校の開校とともに教会史と新約釈義を担当してからである。日本キリスト改革派教会創立には諸般の事情で参加できなかったが、加入後は同教会の変わらざる指導者として活躍する。伝道・牧会の多忙さの中で、一九五九年同人誌「リフォームド」の編集にも携わる。

③改革派教会の説教への影響

今回のテーマからして、田中牧師の全般的な評価をすることはできないし、その必要もないが、日本キリスト改革派教会の説教に対する田中牧師の影響という点では、神学校の教師であったということ、そして、神港教会の説教者としてだけではなく、特に青年たちをはじめとする改革派教会の信徒の心に刻み付けられるような説教、聖書講解を続けたということを看過できないのである。

その教派全体の説教の特色と一人の説教者の説教とを簡単に結びつけることはできない。だから、田中牧師の説教そのものが日本キリスト改革派教会の説教の全てであるというような論は暴論だし、各個教会で行なわれている説教

は、それぞれ異なる。ただ、いえることは、教職を養成する神学校で教育を受けた説教者の説教がよかれあしかれ、好むと好まざるとに関わらず、その卒業した神学校でいかなる説教を聞いたのかで、大きく左右されることは否定できないのではないか。その場合、単に、実践神学の一部門である説教学を誰が担当したのかという問題だけではない。我が国の神学教育は大抵近隣の教会に神学生を派遣し、その教会で訓練するシステムを採っている。だから、説教者として訓練されている最中の派遣された教会でどのような説教を聞いたかは、その教派の説教の特色形成の重大な要因であると考えられる。神戸改革派神学校の場合、その創設期以来、神戸地区の教会で神学生が教会生活を営む。田中牧師の説教を多くの神学生が聞く。だから、田中牧師の説教が改革派教会全体に、その説教史において、大きな影響力を残したとみることはあながち見当はずれではないと思われる。田中牧師は神学教育においては、いわゆる説教学を担当しなかったようである。（筆者は田中牧師から、ある時期、きわめて短期間であるが、説教学を担当したという話を聞いた記憶がある。大会記録にある神学校理事報告からその事実を見出せなかった。暫定的に担当教師の休講の期間、臨時に担当したことがあったのかもしれない）しかし、説教演習には忠実に参加し、時には辛辣な批評をしたようである。[19] 田中牧師が日本キリスト改革派教会の説教に多大の影響力を行使し得たのは、神港教会の講壇と関わりがある。長く、同教会が日本キリスト改革派教会の中で最有力であったというだけではない。神学生の多くが神港教会に出席し、そこで田中牧師の説教を聞いた。その厳密な聖書講解の方法、さらに説教に対する情熱を学び、神学校の学び舎を出たあとのそれぞれの講壇で、神港教会で学んだ通りの説教を始めようとするものが多くあっても当然である。さらに、田中牧師は神学校で、新約釈義を担当しているが、主として、ガラテヤの信徒の手紙を講解するという形でこれを行なっている。[20] このガラテヤ書講解は、新約釈義という科目でなされているが、内容は説教であった。むろん、厳密には説教ではない。聖書研究といってもよいもので（シュニーヴィントの「放蕩息子」参照、

新教新書、）文書批評やガラテヤ書の歴史的な分析など、今日、新約釈義と言われている手法を駆使するという、いわゆる、学問的な釈義でもない。しかし、このガラテヤ書の講義を、田中牧師は高知時代からいろいろの機会で試みられている。青年たちの集会でこれを聞いたものが聖書の読み方に開眼したという手記も見られる。[21] このガラテヤ書講解が、説教と共に、神学生の聖書の対する接し方、読み方に大きな影響を残したことは想像に難くない。何よりも聖書からメッセージを読み取ることの喜びを、この講義から学び取ったものが多い。

説教は、ある意味で、聖書を読み、その語るところを誠実に、しかも、明瞭に受け止める感受性を必要とする。厳密な聖書の釈義を経ても説教が魅力あるものとはならない。説教者の実存で受け止められた印象、記憶、感覚が説教に反映する。説教が力を持つのは、この説教者の聖書に対する経験の深さであろう。これは生来の能力といったものではないし、また、神秘的に与えられる所与の才能でもない。極めて自然に、しかし、意図的になされる訓練の賜物である。田中牧師の説教や聖書講解が神学教育の中で与えた教育の成果は、日本キリスト改革派教会の説教に大きな足跡を残すことになったが、以上のような背景に注目したい。

説教者としての、田中牧師が重んじたもう一つの場は、教師会（牧師会）である。カルヴァンのジュネーブでの教会改革の戦いの拠点はジュネーブの牧師会（コンパーニュ）であった。[22] ジュネーブの牧師会は単なる牧師の親睦団体ではなかった。まして、牧師たちの既得利益を確保する共同体といったものではない。時には市当局に対する、教会の意見を述べる機関であり、教会改革の中枢部であった。それだけではない。牧師会は牧師候補者の選定、任職に当たっての試験を実施するという、現在の改革派・長老教会の中会の機能を持っていた。牧師候補を神学教育機関で養成する以前は牧師会が徒弟制度的に手を取り足を取って教える場所であった。さらに、牧師会は教職の訓練を実施する機関であった。もし、教職が異端的な思想を抱き、発言したり、生活上の好ましくない評判が立ったりした場

合、牧師を譴責し、市当局に告発した。

牧師会が重んじられること、これは改革派教会の政治的統治の根幹に関わる問題であった。ジュネーブでは週に一回、説教がなされ、牧師たちが相互に批判しあった。こうして、説教の神学的・教理的な不一致や腐敗を避けようとした。

田中牧師が教師会に期待したのはこれであった。むろん、この理念は現実には実現が困難なものである。教師会が形骸化し、単なる教師の親睦や連絡のためにしか機能しないということは起こりうるし、正直に語れば、日本キリスト改革派教会の教師会がカルヴァンの理想からかけ離れているといわざるをえない。にもかかわらず、田中牧師は、教会政治的な発言だけではなく、後進の牧師たちの説教者としての成長に貢献するような配慮をされた。

狭い意味での説教者としての影響だけではなく、教会の指導者として人格的にも教会政治家としても、日本キリスト改革派教会に、田中牧師は大きな足跡を残した。神港教会牧師のまま、一九七九年四月一一日、その生涯を終えた。

五　田中剛二牧師の説教の特色

田中牧師の説教集は現在四冊刊行されている。安田吉三郎牧師（現神港教会牧師）が紹介しているように、[23] 田中牧師の説教原稿の一部が刊行されたにとどまる。残存している遺稿が早くおおやけになることを切望している。ただ、これらは説教原稿であり、実際の説教の記録ではない。実際になされた説教を文書にすれば倍の量になるのではないか。神港教会にはリール時代からのテープが保存されている。

それでは、記された説教は実際の説教でないから価値がないのかというと決してそうではない。確かに説教はある

時、ある場所で、特定の会衆に語られた、その点では繰り返されない、一回限りの性格を持つものである。しかし、説教でなされたメッセージは一回限りで終わってしまうものではない。メッセージそのものは書かれた説教であっても明確に説教されたメッセージに違いなく、その使信は時間を超えて有効である。

さらに、田中牧師の説教原稿は、ほとんど出版できるような完全原稿の形で残されている。（すでに出版されているペテロの手紙第一の説教の場合、編集者の安田牧師によると、説教原稿を殆ど修正していないとのことである）

田中牧師は説教の際、講壇には原稿を置くが、説教中ほとんど原稿に目を落とすことなく説教された。いわゆる説教原稿朗読型の説教者ではない。忠実に説教原稿を読むタイプが誤りとするわけではない。しかし、原稿に縛られるあまり、演述という面でも自由さを失う。説教は、その瞬間、会衆との対話でもある。これが一人の説教者が同じ原稿を用いても、別のところで語られた説教は別の説教となる理由である。説教者は聖霊に満たされて語る。聖霊の自由がそこで保証されていなければならない。説教原稿に縛られないで説教するのは聖霊の説教における自由の余地を残す。実際、田中牧師の説教原稿を朗読すれば、三十分内外で終わるが、なされた説教は短くても四十五分、長い時は一時間近い説教となる。その時々の教会の霊的、現実的な事情を心に思い浮かべ、問題を抱える信徒の顔を見て、説教は揺れ動く。このことは自然な説教者の思いであろう。このようなその瞬時に働かれる聖霊の導きを考慮しない説教はどんなに整った、準備のよくなされた説教であろうとも、生命力を失った説教とならざるをえない。

田中牧師の説教は連続講解説教である。あえて、連続という言葉をつける。復活節や降誕節以外、若干の例外はあっても、それ以外は、聖書を一貫して連続して講解する。聖書の講解には、いわゆる聖書日課に基づき、その日に割り当てられた聖句の講解をいう形もありうる。また、毎週ではなく、例えば、月一回の割合で、連続したテキストを解説するというやり方もある。しかし、田中牧師は愚直にも思われるくらい、連続聖書講解に固執している。誇張し

ていえば、戦後の神港教会の講壇は連続講解説教以外を聞いていない。

神港教会ばかりではない。日本キリスト改革派教会の説教は、教職者に尋ねると、ほとんどが講解説教、それも連続聖書講解説教を試みている。なぜ、このような説教が好まれるのか。極端にいうと、改革派教会では連続講解説教でなければ説教ではないといわんばかりに隆盛なのか。他の教派でこのように連続講解説教が盛んであるところは珍しいのではないか。この傾向に田中牧師の説教が影響していると推測するのはあながち間違いではないように思われる。しかも、講解説教にも多くの形態がある。講解説教の代表的なもので、今日の多くの説教者に影響力のある説教は鎌倉雪ノ下教会の牧師であった加藤常昭牧師のものであろうと思うが、加藤牧師の講解説教は一言で言えば、広がりのある説教である。加藤牧師の牧会上の経験、対話、所感などが説教の中に織り込まれている。それ比べて、田中牧師の説教はきわめて説教者自身を後退させている。説教原稿ではほとんど、いわゆる例話・イラストは出てこない。禁欲的ですらある。そのために説教は聖書の言葉に固執する。聖書の言葉の解説に終始する。むろん、いわゆるランニング・コメンタリーの類いではない。聖句の表面だけを、「さらっと」説明するだけの説教ではない。この種の講解説教が改革派教会では一般的である。ここに田中牧師の影響が濃く残っているのではないか。

禁欲的だけではない。重厚な講解説教。これが田中牧師の説教の特色である。これは抽象的な表現で、何をもって重厚と言いうるのか、問われることであろう。田中牧師の重厚さは内容に関わる。田中牧師の説教が目指しているものは、説教テキストが持つメッセージを明らかにしようとする点である。筆者は、協力牧師であったころ、田中牧師に愚問を発したことがある。「どのようにして説教するのか」田中牧師の答えは明快であった。「君が聖書から、まず聞きなさい」禅問答めいた質疑応答であるが、田中牧師の説教に対する姿勢を端的に語っていると思う。説教はその説教テキストが語るところを明らかにして始めて、説教された神の言葉が神の言葉、という第二スイス信条の命題が

成立する。説教はしばしば、説教者の書斎での聖書研究の発表にとどまる。あるいは、説教が、社会批評であり、文学評論、つまり、新聞記事への所感や、説教者の読書感想、あるいは政治理念のアジテーションとなってしまう。説教が神の言葉の説き明かしであるとすれば、説教者は説教テキストの固執しなければならない。これが説教の重厚さを裏打ちする。

ただ、聖書の解説だけでは重厚さは現れてこない。その内容と関わる。説教の内容はひとえに福音である。説教が深い意味で人の心を動かすのは、そこで語られている神の言葉が福音的なものだからである。イエス・キリストにおいてなされた贖いの事実を根拠にして、聖霊の業を通して、救いの恵みに呼び出す（有効召命）神の愛が明確に提示されなければならない。

そこから、田中牧師が説教者としての信仰を説教で語るのに優れた説教者であったといえるのである。説教を聞いて、その説教者が「本当に信じている」と感じさせる迫力が必要なのである。説教者の実存を語る。説教が、その瞬間に語られる、繰り返し不可能なただ一回限りの性格を持つのであれば、その時々の語る説教者の実存が説教に現れてきて当然である。誤解を恐れず言うならば、結局説教は説教者の信仰を語るのであってそれ以外のものではない。

田中牧師の説教が改革派教会に影響を残すのは、連続講解説教という形だけではない。この形を通して一貫して、聖書の福音信仰を使信として語ろうとした点が、改革派教会、特に説教者に影響をしたがゆえ、現在のように、日本キリスト改革派教会で連続講解説教が隆盛である理由だということができるのではないか。

田中牧師は公的礼拝において、説教のテキストをほとんど新約聖書から求める。礼拝において、聖書朗読の場合も、その説教のテキストのみが選択され、旧約聖書や説教と関わりのないテキストが選ばれることがない。後者の場合、

説教テキストの前後のテキストさえも、多くの場合選ばれないほど徹底している。田中牧師の説教は、「禁欲的」ということができるが、ここでも、説教はあくまで与えられた神の言葉の説き明かしに徹すべきであり、無駄に、余分にテキストは選ばれてはならないのである。このようなテキストの選択の問題は、別の視点も成り立つ。特に新約偏重というべきか、旧約の軽視というべきか、そのような批判も成り立つ。公的礼拝は神の言葉との出会いであれば、できる限り、全聖書が語られなければならない。改革派の伝統は新約同様、旧約も説教されることである。（田中牧師は、週日の祈祷会で、旧約聖書を一章づつ解説するという習慣を続けられた。筆者の記憶では、一九七五年頃その企てを終了された。おそらく、毎月三、四回程度の割合であったから、三十年近くかかったのではないか。田中牧師が旧約聖書を軽視していたのではない。）何故、新約偏重であったのか。田中牧師はメーチェンに師事して以来、新約学の造詣は深くあったが、筆者に述懐されたことだが、旧約学、特に旧約釈義に得意ではなかった。むろん、それは謙遜の言葉であり、古い世代の神学教育の現実を示しているのであるが、ここでも田中牧師の禁欲的な説教者の特徴が現れているとはいえまいか。説教者の好みも問題もあろう。しかし、主として新約聖書が説教テキストに選ばれたもう一つの理由は、説教者の自覚と関わる。連続講解説教がなされるのは、その新約文書が持っている主題を会衆に伝達するためであると指摘したが、旧約よりも新約が選ばれるのも、その動機は多くの説教者に共通していると推測できる。つまり、福音を、そしてその内容であるイエス・キリストを鮮明に伝えるという動機である。田中牧師の説教の力は、鮮烈にイエス・キリストを明示し得ているところにある。

田中牧師の説教は決して平易ではない。もちろん説教であるから、難解極まるというような、学問的、衒学的説教ではない。しかし、説教原稿を読んでもそうだが、実際なされた説教も、大衆向きというのではないだろう。知的な

説教ともいいうるが、神港教会という説教を聞く聴衆の特色もそこに反映している。しかし、聴衆がすべていわゆる知識人ではない。使用されている言語が学術的というわけでもない。一つ一つの言葉は慎重に選ばれている。説教原稿の段階でこの慎重さは意外に思われるほどである。田中牧師があるとき、優れた説教者の名を挙げた事があるが、その中で、山室軍平がいた。山室軍平の説教は「平民の福音」「平民の聖書」に見られるように、庶民にも分かるような語り口で語られている。田中牧師が、庶民をなおざりにして高踏的であったというのでもない。平易ではないというのは、語られている説教の使信が一般受けしないという意味である。要するに聴衆にこびへつらわないのである。連続講解説教はこのことをある程度必然的なものとする。説教題の選択からそうであるが、聴衆をまず念頭にするのではなく、説教テキストに拘束される。

六　説教分析の試み

実際田中牧師はどのような説教をされたのか。ここで取り上げるのは、ヨハネの手紙第一　二章一八から二五節までの説教である。[25] まず、説教の冒頭で、それ以前の説教された内容をふり返る。前回の説教内容の場合もあるが、数回分の場合もある。連続講解説教であるから、これは当然のことといえる。しかし、単に技術的なものではない。連続講解説教は一回毎の主題説教と異なり、毎週出席している会衆を前提にする。しかし、礼拝にはそのような人々だけがいるとは限らない。その時初めて聞くものにも分かるように、前回までのおさらいがなされる。このような会衆に対する配慮というメリットもあるだろうが、連続講解説教の、導入におけるくり返しは、説教全体の枠組みと関わっているし、文脈から離れないという講解説教の押さえどころが意識されているのである。

田中牧師の説教では、まず説教の導入のために、いわゆる復習がなされているが、この部分では、説教される文書の思想が押さえられ、確認される。つまり、連続講解説教の目的が何度も確認されるのである。パウロならばパウロが、福音書記者ならば福音書記者が何をその文書で伝えようとしているのか、これを踏まえた上で、その当日の説教テキストが解説される。これは些細な問題ではない。実際、田中牧師から教えられたことであるが、説教者は何度もテキストを読む。その説教のテキストの部分だけではない。その文書全体から、著者が、そして聖霊が何を語られるのか聞き取らなければならない。それは連続講解説教の一回分の説教を生かすのである。

さらに、目立つのは「学びましょう」という呼びかけで説教が始まること、そして、本論でもそうだが、一人称（わたしたち）の多用が顕著である。一人称の多用は、田中牧師の説教が独白というのではない。そのことは、共に学ぼうという語りかけが証明するのであるが、説教を教会との共同のわざとしようとする説教者のいわずもがなの姿勢を示しているように思われる。説教分析的には「説教者の言葉」がきわめて多い説教となっている。

田中牧師の説教の導入はぶっきらぼうというか、説教学的に言えば、いわゆる説教の導入には適切ではない印象を与えている。会衆の興味を引くような導入の技術は一切用いられていない。不器用ささえ感じられる。（しばしば、説教者の挨拶で始まる説教を見聞する。）しかし、この導入は、田中牧師の説教の特質を表していることを看過できない。

続いて、説教テキストの説き明かしに入る。田中牧師の説教は、説教学的に整った構造をとらない。つまり、序論、本論一、二、三、結論とか、「起承転結」、あるいは弁証法的な「正・反・合」といった形式の整った説教ではない。どこからどこまでが本論なのか明確ではない。確かに本論部分というのは見出せる。しかし、量においても、文体においても、一見して本論と分かるような構成をとらない。何故このようになるのかは、田中牧師の説教が説教テキストにあくまで添うた説教であるためである。形の整った構成を犠牲にしてまでも、説教のテキストの順序、内容、論調に固執する。

説き明かしは、多くの場合、二つの手法が取られる。ひとつは、そのテキストの鍵となる言葉、単語の解説から展開する方法である。第二は、関連する聖句の引用と短い解説から展開を行なう場合である。

田中牧師の説教で目を引くのは、その説教の主題、あるいは、主題に近い内容が語られる時、それに関連する他の聖句が矢継ぎ早に引用されることである。今取り上げている説教（Ⅰヨハネ二・18～28　反キリストと教会）では両方の「技法」が行われる。言葉の説明は、単にギリシア語のレキシコンの引用に止まらない。確かに、ギリシア語の語彙の歴史（意味するところの発展やその使用例の説明）がなされることもあるが、その背景には厳密な釈義が行われている。

田中牧師の説教は引用聖句、関連聖句を縦横無尽に使用するが、単にコンコーダンスを引いて、関連の文章を並べるだけではない。その選択にはかなり神経を使っている。これが田中牧師の説教を魅力あるものにしている。旧約も説教は聖書研究に止まるものではない。過大に他の聖書文章が引用されてもそれでメッセージが伝わるわけではない。むしろ冗長という印象を聴衆に与えるだけであって、ただ関連聖句を列挙するだけの、あるいはコンコーダンスを引いただけの引用だけでは、心ある会衆にはすぐに小手先の説教者の細工を見抜いてしまうことになる。だから、引用聖句の数だけではなく、その選択は慎重で深い洞察を求められる。

本論は、先に述べたように、主題が何個かに分類されたり、そのポイントが論理的に移動していくというような展

開を示さない。その理由は述べた。

本論の展開もまた説教テキストに縛られている。講解説教でありながら、実際には説教者の問題意識が語られ、特に説教の本論部分において主題説教と化する例は枚挙にいとまがない。田中牧師も本論で何も主張しないというようなことは無論ないわけであるが、時には極めて弁証的な内容を語るということも多い。今取り上げている説教でも、特に終末論、さらに、キリスト論に関わる言及があるが、いずれも、改革派神学の主題を擁護する内容となっている。

田中牧師の説教において感じさせられるのは、ひとつの言葉、文章を豊かに瞑想することである。田中牧師は、神港教会の夕礼拝ではしばしばヨハネによる福音書の説教を試みている。この説教は、会衆も大体は信徒だけであり、比較的リラックスしたなかで語られることもあって自由な説教である。（残念ながらこの夕礼拝説教はメモのようなものと用意されているが、きちんとした原稿を持たないで講壇に登られている。）それだけに、聞くものも緊張感を強いられない説教であった。説教テキストが選ばれるけれども、その全部を解説しないで、時には一句だけを取り上げ、それを膨らませ、連想し、言葉を変え、そこで語られている使信をいろいろの方面から追い求めていく。これは、瞑想とか黙想と呼ばれるべきものである。

ヨーロッパの伝統であるが、説教だけではなく、説教者が聖書を自由に、深く、連想し、思い巡らし、思索し、神と対話し、祈りに応答するという黙想集がしばしば出版されている。この種の出版が日本でも説教黙想として紹介されている。ただ、黙想集ではなく、説教集というカテゴリーに入れられていることが多い。実際、説教黙想として、その出版が続いたのは、ドイツの告白教会の教会闘争の中で必要に迫られて、という面のあることを否定できないが、黙想というジャンルが説教とは別であることは明白であろう。[26]

ボンヘッファーがフィンケンヴァルト牧師補研修所でも学生にこの説教の黙想を強いた。告白教会の教会闘争を続けていくためのエネルギーは、ただ戦うだけでは枯渇してしまう。ボンヘッファーは告白教会の闘争が説教を有力な武器とすることを見抜いていた。教会にとって、困難な時代であればあるほど説教の力は重視される。

田中牧師は早くからアブラハム・カイパーの黙想集に関心を示されていた。アブラハム・カイパーは、戦前から「カルヴィニズム」によって、紹介されていた（上田訳、小峰書店から改訳版が出版された）。カイパーのキリスト教文化論は戦後の日本キリスト改革派教会でも、指導的な原理であった。[27] ところが不幸にして、オランダ改革派神学の一面だけが導入され、その敬虔主義的な側面は顧みられなかった。カイパーの黙想集は深い霊性を示している。田中牧師はこのカイパーから説教に対して影響を受けているということを指摘したい。

カイパーの黙想集では、特に、キリストの贖罪をめぐる黙想集がすぐれている。そこに示されるのはイエス・キリストの贖いの意味している、安らぎ、平安、感激である。カイパーは、ひとつの聖句、時には一単語から、思い巡らし、連想し、イメージを膨らませていく。たとえば、詩編の「大波が越えていく」[28] という言葉について瞑想していく（讃美歌三二二参照）。

田中牧師の説教に、このようなカイパーの瞑想の反映を見ることができる。リラックスしてなされるヨハネによる福音書の説教ではこのような手法が用いられた。（このヨハネ説教が文書として残されていないのは残念である）こんにち、キリスト者の霊性の問題が再評価されようとしているが、日本キリスト改革派教会の説教の課題でもある。

この説教では、「反キリスト」がひとつのテーマを構成している。このテーマは教義学の終末論と聖書神学、特に黙示文学の理解がなければ明確な説教とはならない。実は、この説教を取り上げたのは、田中牧師の説教の特質であ

る、正統的な改革派神学理解が説教に現れてきているからである。論争的な内容を含む時は、田中牧師は慎重に伝統的な改革派神学の教説を踏まえ、しかも、明快に提示することを忘れていない。特に現下の「キリスト論」の混乱に対して情熱的に「神の子キリスト」を強調する。改革派の説教は時に教理的過ぎるとの指摘を受けるのだが、また同時に、教理的健全さが改革派教会の説教の安定性を生み出しているのである。そして、これが田中牧師の説教の特質である。

むろん、説教は教理論争だけではない。むしろ、そこで語られるべきは慰めである。ペテロの手紙第一の説教は、ペテロの手紙そのものが近く来るであろう苦難に対処すべく記されたという一貫した視点で各節句が解説される。聞き手も同じ苦難に直面して、受けるべき慰めを、説教者は丁寧に語る。多くの聴衆の心を捉えるのはこの慰めである。説教が教義学的な枠組みの中で知的な意味で正当であっても、御言葉が持つ固有の慰めが励ましが欠けておれば、その説教は失敗である。

一回の講解説教がそれだけで統一性、もしくは完結性を求められるならば、田中牧師の説教の結部は、これまた説教学的に、定型を踏まえていない。しかし、一回毎、説教のまとめにこだわる理由はないように思われる。説教の結論で、会衆への実践的な勧告がなされたり、適用が行なわれる。あるいは、連続講解説教であるから、次回説教への橋渡し的語句で終了することが予想されるが、多くの場合、むしろ、余韻を残すような形で終了するという印象を残すことも講解説教の一つの技量ではないか。[29]

結論

日本キリスト改革派教会の説教の特色を、田中剛二牧師という教派教会創立に関わった説教者を通して、分析を試みた。改革派教会は、今後どのように教会存立の基盤を見い出していくのか、これはひとり、改革派教会の課題ではない。二一世紀に向かう、諸教派はどこに教会の存在の基礎を築いていくのか問われている。信徒の訓練・教育・霊性・宣教・社会的実践・健全な家庭形成等々。どこに、教会の底力を求めていけばよいのか。その答えは、「説教」であろう。講壇が祝福されない限り、プロテスタントには存在の価値が見出せない。その説教はいかあるべきかはどの教派・教会固有の問題であり続けるであろう。連続講解説教という古典的な形が今後も教会の説教の力を提供できるかどうか、真剣に答えていかなければならないだろう。

注

1 カルヴァン『キリスト教綱要』(渡辺訳)四・一・九。
2 E・ダンカン、関田・中嶋訳、教文館『世界説教史』I、二三六～二六九頁。
3 倉松功『ルターにおける改革と形成』六八頁以下。

4 E・ダンカン、関田・中嶋訳、教文館『世界説教史』Ⅱ、八五～一〇二頁。

5 T. H. H. L Parker, *The Oracle of Calvin.* 著者は、聖餐論におけるキリスト臨在の方式と説教におけるそれとの類似関係を明らかにしようとしている。つまり、説教がサクラメンタルな特質を持つというのである。同著者の *John Calvin : A Biography*, p.25) も参照。

6 小平尚道『プロテスタンティズムの本質』宗教改革の方法――礼拝観、九八頁以下。

7 ルター、前野正訳『ルター卓話』上、一四五～一四八頁。

8 Howard L. Rice, *Reformed Spirituality*, chap.4 "Sludy: The Use of the Bible in Reformed Spirituality", pp.101-102. カルヴァンの説教は、文脈から外れた聖書解釈を退けるという原理から、必然的に連続講解説教にならざるをえなかった。

9 第二スイス信条 第一『神の言葉の説教が神の言葉である』渡辺訳、宗教改革著作集一四、三四六頁。

10 ブローダス『説教学』、三五四頁以下。ブローダスは題目的説教・題詞的説教・解釈的説教の三種類の型を挙げている。なお、本書の原書が長く神戸改革派神学校で説教学の教科書として使用された。

11 榊原康夫「聖書の講解説教について」改革派神学第一五輯。なお、この論者の講解説教の定義によれば、田中牧師の説教は厳密な講解説教とは言い難いものとなるが、釈義説教であれ、ホミリーであれ、講解説教と定義できるのではないか。

12 日本キリスト改革派教会の教職による説教集は、次のようなものである。

野田辰夫『葡萄の枝』など。

橋本亘、説教集『創世記』。

角田桂嶽説教集。

諏訪哲夫牧師説教集。

佐藤慎二『希望はここにある』。

上河原立雄『御言葉に生命を託して』、『御恵みに支えられて』。

榊原康夫『マタイ福音書講解』、『ヨハネ福音書講解』、『使徒の働き講解』、『エペソ書講解』など。

諏訪一朗『十字架こそ神の栄光』。

13 田中剛二『第一テサロニケ書』、『第二テサロニケ書』、『第一・第二・第三ヨハネ書』以上 すぐ書房刊。『ペテロの手紙第1』（著作集第四巻）新教出版社。

14 その他、若手教師の説教集は、聖恵講解シリーズで継続中。

15 『神港教会七十年史』三〇七～三二〇頁、同教会発行。

『エス・ピ・フルトンの生涯と神学思想』（つのぶえ社刊）所載の回想文。

Skilton (ed), *Machen's notes on Galatians,* これは雑誌の連載になったものの遺稿であるが、説明の仕方、弁証、文体などをみれば、田中牧師のガラテヤ書研究に大きな影響を与えたことは容易に想像される。もっとも、田中牧師がよく用いているのは、J. B. Lightfoot, *The Epistle of St. Paul to the Galatians,* である。

16 『ペテロ前後書』注解（長崎書店）。

17 田中剛二著作集、第三巻。

18 多田素『牧会百話』。吉田満穂牧師による多田牧師の伝記が記されている。

19 『改革派神学』前掲書、思い出集には田中牧師の薫陶を受けた教職の回顧談が記されている。

20 前掲書。

21 思い出集『厳しく優しく暖かく』、『主にあるきずな』いずれも神港教会刊行。

22 『カルヴァン編』新教出版社刊 にジュネーブ教会教会規則。『原典 宗教改革史』ヨルダン社にジュネーブ教会教会規定。牧師会の規定は、教会規定。

23 田中剛二著作集第四巻『ペテロの手紙・第一』巻末の解説。

24 前出、ブローダスの説教の分類参照。

25 田中剛二『第一、第二、第三ヨハネの手紙』（すぐ書房）、九〇～一〇〇頁。

26 教団出版部・説教者のための聖書講解（すでに終刊）の冒頭論文。

27 改革派創立宣言にみられ、岡田稔『カルヴィニズム概論』に詳しい。

28 A. Kuyper, *His decease at Jerusalem*, p.45-54.

29 榊原康夫、前掲論文。

（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・
神戸改革派神学校講師（歴史神学））